

# 「今日の」「ぼくら」の「世界」を見つめる（解説に代えて）

東北芸術工科大学の小金沢ゼミ(芸術学部美術科日本画コース)では、学内の課題・成績と関わらない、ゼミの自主活動として読書会と展覧会を実施することを掲げ、2022年11月、3期目のゼミをスタートしました。展覧会は、まさに今・ここで行われているこの展覧会「井戸と窓」。

では、読書会はというと、2022年冬から2023年春にかけて、2冊の本——岡本太郎『今日の芸術』(光文社知恵の森文庫、1999年[初版:1954年])、高橋源一郎『ぼくらの戦争なんだぜ』(朝日新書、2022年)を読みました。

全員、あらかじめ読んでくることを前提として、章ごとの担当を決め、担当者がレジュメを作り、発表。その後、全員で意見交換を行う。

岡本太郎『今日の芸術』と高橋源一郎『ぼくらの戦争なんだぜ』は、前者は戦後の時代の芸術論、後者は文学から読み解く戦争論。

刊行時期は、半世紀以上の時代を隔てていますが、どちらにも共通しているのは、「個人」に価値を置いている点です。

『今日の芸術』では、岡本太郎は「絵はすべての人の創るもの」であり、それが「あなた自身を創造する」のだと言い、『ぼくらの戦争なんだぜ』では、高橋源一郎は「ぼくら」を構成する個人としての「ぼく」という主体を重視し、「戦争」を遠い/世界の外側の存在としての「彼らの戦争」ではなく、近い/世界の内側の存在としての「ぼくらの戦争」として考えることの必要性を説きました。

独立した個人としての「ぼく」であり「わたし」。「世界」について、今を生きる個人として主体的に考えること。

本展のテーマである「井戸」そして「窓」は、言わば、どうにでも解釈することのできる、「おおきな器」のようなものだと思います。

そこには、どんなものも放り投げることができる。「井戸」とは何で、「窓」とは何か。

学生たちは、その問いに対して自分なりの答えを見つけようとするしかありません。

この会場——決してサイズの大きくないTHE LOCAL TUAD ART GALLERYでは、前半を「井戸」、後半を「窓」のための空間と定め、「井戸」から「窓」へと向かう(行き来する)展示構成としています。「井戸」では、新作・旧作を問わず、「作者が、そう解釈することのできるもの」を。そこには、下絵やドローイングなどの、「作品以前」と見なされがちなものも含まれるかもしれません。「窓」では、全員同じフォーマットを決め、縦910×横652mm(P30号)の新作が並びます。同じフォーマットだからこそ、「窓」に対する解釈の違いも、いっそうあらわれることでしょう。

大切なことは、「今日の」という現在性をともなって、「ぼく」「わたし」という主体から制作されたものであることです。

そこから見つめられる世界が、どのようなものであるのか。

展示設営を目前とした今の私には、全貌は計り知れませんが、それらの作品が、しっかり「ぼく」「わたし」以外の/広い世界を見つめながらも、個人としての思いを十分に込めたものであって欲しいと思います。片側に留まらず、そのあいだを行き来することが重要ではないかと、私が考えるからです。

そして、願わくば、ご来場くださった方々が、それらの作品を通して、「今日の」「ぼくら」の「世界」を、個人として見つめる機会となりますように。

2023(令和5)年8月14日

小金沢智(東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コース専任講師)